

第一八回春季全国高等学校演劇研究大会

特別企画寸劇

「これまで、そして未来へ」

令和六年三月二十二日

作 岡田 篤

上演 福島東稜高校演劇部他

【登場人物】

リオ

ウイナ

ミヅキ

リコ

ユナ

ハルキ

コンノ先生

ぺしゅ。

アスカ

○シーン①「二〇二四年三月」

緞帳が上がる。

教室の中。

リオ、ユナ、リコが座って何か話している。ハルキは少し離れて一人で座っている。
ミヅキが教室に入ってくる。

ミヅキ おはよう。

リオ あ、ミヅキ、おはよう。

ミヅキ 何話してたの？

ユナ タベの地震のこと。

ミヅキ ああ、タベ地震、すごかったよね。大丈夫だった？

リオ 私は、友達と「三してて、「これヤバくない？」って打ってた。

リコ うちは犬がおびえてて、ソファの下から出てこなかった。

ユイナが入ってくる。

ユイナ おはよう。ねえ、昨日の地震ヤバくなかった？私、トイレ入ってて、もうパニック。座っ

てもうこんな感じ。そしたら上からトイレトペーパー、頭の上に落ちてきて「ギャー」
って感じ。

ユナ 分かる。狭いところにいると怖いよね。

ミヅキ 何か、今年、地震多くない？

リコ 多い！

ウイナ お正月もすごいのがあったよね。

リオ ああ、能登半島地震ね。あれもすごかったよね。

リコ 何かニュース見てて、自分たちのこと思い出しちゃった。

リオ ああ、あれね。4歳くらいときだったから、あんま覚えてないけど、食器棚とかテレビとかが倒れたのは覚えている。

ミヅキ 私、保育園でちょうどお昼寝してたときでさ、先生に起こされて、外に出たことは覚えている。

ウイナ 私も保育園でお昼寝してた。急いで外に出たから裸足だった。

ユナ 私もなんとなくしか覚えていない。たしか、テレビ見ながらアイス食べてた。あれ？あの時のアイスって、どうしたかな…？

リオ でもさ、車の中で寝たりとか、いつもと違う感じで、ちょっと楽しかったかも。

ミヅキ そうそう。何かキャンプみたいだった。

ウイナ それな。ごはんもいつもと違って。お菓子だけだったり。

リコ 私は…。

リオ ん？

リコ 私は、あんまりいい思い出じゃないな。むしろ最悪な日だった。

ミヅキ そうなの？

リコ うん。ほら、私の誕生日って、三月十一日じゃん。

ユナ ああ、そうだね。

リコ 四歳の誕生日でさ、ケーキ屋さんに誕生日のケーキを予約してて、すごい楽しみにしてたんだけど、地震があつて、結局取りに行けなくて…。家で用意していたイチゴにろうそく

さしてお祝いしてもらったの覚えてる。だから、毎年誕生日来るたび、それ思い出してき。家族も毎年、その話ばかりで…。

リオ
そっか。そうだよね。

女子たちの話を聞くともなく聞いていたハルキが、途中からずっと見ている。

ウイナ
（ハルキが見ていることに気づいて）ハルキくん、どうしたの？

ハルキ
あ、ごめん。いや、みんな、あのときのことを話してるなって、聞こえてきて。

ミヅキ
ハルキくんも、震災の時の思い出とかあるの？

…実は、俺、浜通りのいわきの出身でさ、じいちゃんを津波で亡くしてるんだ。それに、親戚の家が富岡で、原発事故の影響で避難区域になっちゃって、ずっと立ち入り禁止で、解除になったのはつい最近で…。

ミヅキ
そうだったんだ。

ハルキ
家も津波でダメになって、しばらく避難先で生活したり、仮設住宅にもいたことがあって、あんな思いはもうしたくない。

リオ
あ、ごめんね。楽しそう、なんて言っちゃって。

ハルキ
いや、俺もあの時4歳で、よく分かってなかったし、こういうのって、やっぱり経験した人でないと分かんないよなって。実際、地震の日よりも後の生活の方が何倍も大変だったけど、今、こうして普通に生活していると、あの時のことが夢だったんじゃないかなって思うときもあるし。でも忘れちゃう自分も嫌で…。

ウイナ
そうだよね。私たち、まだギリギリで覚えてるけど、一個下の後輩たちは、もう覚えていないって言うもんね。

ユナ そうそう。私もほとんど覚えてないけど、親からこうだったって、聞いて、ああ、そうだったんだって思うけど、もうすぐまだ生まれてない子たちが入学するよね。

ミヅキ 私たち、平成十八年生まれだけど、えーと、震災っていつだっけ？

ハルキ 平成二十三年。

ミヅキ そう。もうすぐ平成二十三年生まれが高校に入ってくるのよ。

リオ あ、私の妹、平成二十三年生まれだ。今小六。

ユナ ひえー。震災を知らない子たちか。

ウイナ いや、ゆうて、私たちもギリだから。

ミヅキ そうだね。何かますます「風化」していくんだね。

ウイナ いや、お前が言うなし。

ミヅキ そりゃそうだ。

全員 (笑う)

コンノ 先生が入ってくる。

コンノ おはよう。

全員 おはようございます。

コンノ じゃあ、部活始めるぞ。まずは、発声から。

リオ あ、先生！

コンノ ん？どうした、リオ。

リオ 先生は、東日本大震災のとき、何をしていましたか？

コンノ 震災のとき？

リオ
そうです。

コンノ
高校生だった。

ウイナ
高校生？じゃあ、震災の時のこと、覚えてますよね。

コンノ
ああ、よく覚えているよ。あの時は大変だったなあ。「ふくしま総文」も何とかできたけど、ずいぶん違った形になったからね。

ユナ
「ふくしま総文」って、全国大会のことですか？

コンノ
そう。文化部のインターハイと呼ばれている全国総合文化祭。2011年、平成二十三年の夏に福島県で開催される予定だったんだ。

ミヅキ
予定ってことは、開催されなかったんですか？震災で？

コンノ
いや、開催されたよ。でも、最初に予定していた形とはずいぶん違っちゃったものになったけど。演劇の全国大会は香川県でやることになったし、総合開会式の会場も郡山から会津に変更になって、アトラクションの劇も、全然内容が変わっちゃったし。あ、実は先生はさ、その総合開会式に出てたんだよね。

ウイナ
え？そうなんですか？

ユナ
全然知らなかった。

コンノ
いや、今までそんな話しなかったからね。

リコ
…先生は…。

コンノ
ん？

リコ
先生は、いやそのときの高校生は、どんな感じだったんですか？

コンノ
どんな感じ？

リコ
あの、何ていうか、どんな気持ちだったんですか？

コンノ
そうだな。一言では言えないけど、とにかく不安だった。

不安？

ミヅキ
コンノ

そう。今、どうしていいのかわからない不安、そして、これからどうなっていくんだろうという不安。福島は、浜通りの津波の被害はもちろんだけど、それ以上に原発事故によって放出された放射能による目に見えない被害も大きかった。

リオ

コンノ

放射能って目に見えないし、それに、どこまで人体に影響があるかもまったくわからない。だから、みんな受け取り方がバラバラで、福島に残る人もいたけど県外に避難する人も多くて、分断された。

ユナ

あ、避難の話はよく聞きました。私の近所の人も急に引越していなくなって、その時は何でかわからなかったけど、後から避難したんだって親から聞かされた。

コンノ

高校生って、子供ほど物事を分らないわけではないし、大人みたいに自分で決められるわけでもない。中途半端っていうか、だから不安だったんだ。この先自分はもうどうしたいんだろうって。

ウイナ

コンノ

そういうことなんですね。でも、ふくしま総文開会式で、構成劇をやることになって、県内の演劇部の部員が集まってやったんだけど、みんな同じ思いだった。そして、みんなの思いをセリフにしてぶつけた。そしたら、心が少し軽くなった。

ミヅキ

コンノ

不安に思っていたのは自分だけじゃないということと、これから自分が何をすべきが見えたからかな。

リオ

コンノ

…それは何ですか？
やりたいことをやっていい、ということと、自分の生まれ故郷の福島を大事にしようとい

うこと。

リコ 大事にする？

コンノ そう。当たり前のことなんだけど、その当たり前のことって、なくならないと分からないもんでさ。先生も一か月くらい県外に避難してて、初めて外から福島県を見ていろいろ考えさせられた。ふるさとして大事なんだなって。初めて福島っていうものを意識したよ。

ミヅキ へー。

コンノ それから、自分は何ができるかって考えて、もっと福島を好きになろうって思った。そして、これからどうしていいか分からなかったけど、とりあず、自分のやりたいことをやろうって考えて、大学に行つて、福島で先生やりたいって思った。

ウイナ それで、今のコンノ先生につながるわけですね。

コンノ そう。ああ、思い出したよ。ふくしま総文で劇をやったこと。こうして目を閉じると、あの曲が聞こえてくるような感じがする。

音楽「思うがままに」 照明変化

全員、ふくしま総文の構成劇の一員になる。（黒い東稜演劇部ジャージを着るなど）
ぺしゅ。とアスカが登場する。

音楽F／O

○シーン②「二〇一一年八月」ふくしま総文の構成劇より

ハルキ 2011年3月11日金曜日、午後二時四十六分、マグニチュード9.0の大地震が東に本を襲った。

ミヅキ

あの日は中学の卒業式が終わった後でした。寂しいけど、どこか嬉しさも混じる、どこにもあるようでどこにもない卒業式。そんな幸せな時間は、午後に壊されてしまいました。夢だいいと思います。または映画かなんだと。でもそれは現実でした。

リコ

何で今なんだろう。四十七年に一度の全国総文祭がある年。ある学校の演劇部では自主公演の準備をしている最中でした。高校を卒業したばかりの先輩は、進学や就職を控え、これから新しい生活が始まるつとときに、何で今日この日なんだろう。

コンノ

三月十一日は、あなたにとつてどんな日でしたか？朝ごはん、ちゃんと食べましたか？学校に行きましたか？おはようって言えました？大切な人に好きって言えましたか？

リオ

私は今、自分がどんな感情を持っているのか理解できません。普段だったら楽しいと感じることにためらいを感じてしまうのです。私よりも当たり前の生活ができていない人がいるのに、楽しいと感じていいのか。また災害が起きて楽しいと感覚がなくなってしまうのではないか。今までどうやって自分の感情を理解してきたのだろう。私は今、何を思い、何を感じているのか、この地震が起きて以来、分からなくなりました。私はこれからの生活の中で、どんな小さなことでも幸せだとみんなに感じてもらいたいなと思います。そして、また当たり前の日に、一番幸せな日々にも早く戻ってほしいと思います。

ユナ

今まで当たり前だと思っていたこと、それが失われてしまったことが悔しい。私たちの日常がこんなにも大切で、こんなにもろく崩れ去ってしまう。今二年生の私の最後の高校生活は、これからどうなるんだろう？ちゃんと卒業できるのかな？そして、大好きなこの町は、これからどうなるんだろう？

ハルキ

何もできない自分が嫌になる。本当、自分は役立たずで、何かしようと思ってもできなくて自分に腹が立つ。こんな状況で何ができるんだろうって自問自答してみる。でも結局、何をしていいのか分からない。

ウイナ

家族がいる当たり前、家がある当たり前、大切な人がいる当たり前。その大切な人を守れる当たり前。そして、その人が笑っている当たり前。もし、震災の日に、この当たり前たちが消えてしまうと分かっていたら、もっとたくさん優しくできたんじゃないかな。私たちはこの当たり前のことに慣れ過ぎてしまったのではないでしょうか。この震災をきっかけに、当たり前のことが当たり前にできる、は、当たり前ではないんだと、たくさんの人に気づいてほしい。

ユナ

ライフラインを整備してくれている皆さん、本当にありがとうございます。

ハルキ

日本中、いや世界中からの支援に感謝します。

ミヅキ

これから、自分にできることは何だろうって考えるようになりました。

リコ

もっと人に優しくしようと思いました。

ウイナ

震災を通して、将来の夢が変わりました。

コンノ

不安な日々が続き、なかなか前へ進めない。何もできない苛立ちもある。それでも一歩ずつでも前へ進みたい。大きな一歩じゃなくてもいいから。小さな小さな一歩でもいいから、勇気を持って踏み出そう。俺たちには支えてくれる仲間がたくさんいる。共に手を取り合い、今を精一杯生きて、素敵な未来を必ずつくるんだ。やまない雨はない。明けない夜はない。平和なときには気づけなかった「本当に大切なもの」。俺にとっては兄弟でした。あなたにとっては誰ですか？気づけましたか？今気づくことができたその気持ちを絶対に、絶対に忘れないでください。

リオ

今まで何とも思わなかった田舎が、私にとってのかけがえのない「ふるさと」になりました。福島に生まれて、福島に育って、福島で働いて、福島で結婚して、福島で子どもを産んで、福島で子どもを育てて、福島で孫を見て、福島でひ孫を見て、福島で最期を過ごす。それが、私の夢なのです。

童謡「ふるさと」一番 合唱。(できれば生演奏)

歌が終わったら黒ジャージを脱ぐ。

照明変化(最初の教室に戻る)

ミヅキ

あれ？今、私、どうしてたんだろう？

ユナ

何か、昔の夢を見ていたような…。

リオ

初めてのことでけど、でも何かすごく懐かしいような…。

ウイナ

(ぺしゅ。に気づいて) うわ！何あれ？

ミヅキ

うわ、本当だ！

コンノ

「ぺしゅ。」だ！

みんな

「ぺしゅ。」？

コンノ

そう。「ぺしゅ。」ふくしま総文のときの友達だ。

みんな

友達？

ぺしゅ。

(アスカに向かってしゃべる)

ウイナ

あ、何かしゃべってる。

アスカ

「ぺしゅ。」は声が出せませんので、私が代わりにお話させていただきます。

リオ

えーと、あなたは？

アスカ

私は「ぺしゅ。」のお友達のアスカと言います。今日は「ぺしゅ。」のお供をしています。

リオ

あ、そうなんだ。よろしく。

ぺしゅ。

(アスカに向かってしゃべる)

アスカ

皆さん、こんにちは。わたしは「ぺしゅ。」です。驚かせてごめんなさい。と言っています。

ウイナ 自分で「ぺしゅ。」って言ってるんだから、「ぺしゅ。」なんじゃない。

ぺしゅ。 (アスカに向かってしゃべる)

アスカ 私は福島に住んでいる妖精です。

ウイナ あ、妖精なんだ。ずいぶん大きいけど。

ユナ うん、ちよつと妖精っていうイメージではないよね。

ぺしゅ。 (アスカに向かってしゃべる)

アスカ 今月で、東日本大震災から十三年が経ち、皆さんに、震災のことを知ってもらいたくてここに来た、と言っています。

ミヅキ そうなんだ。もしかして、さっき私たちが夢を見てたのは…。

ぺしゅ。 (手を動かす)

アスカ (同時に) 夢ではありません！あれは、わたしが皆さまに見せた「ふくしま総文」の映像

なのです。と言っています。震災から十三年、福島は復興を遂げている途中ではありませんが、他の地域や世界ではまだまだ災害や戦争が続いています。

リオ 確かにね。

ミヅキ さっき言ってた、当たり前の日常がなくなったらって、私たちも経験したよね。

ユナ そうそう。マスクの生活に慣れちゃったけど、こんなの当たり前じゃないよね。

リオ 私たちも中学の卒業式は、かなりひっそりとやったしね。

ウイナ 歌も歌えなかった。後輩にも見送られなかった。

リコ すっごい寂しかったね。

ハルキ 演劇の練習も、今やつと普通にできるようになったけど、去年まではいろいろ制限されて

つらかった。マスクして発声するのって、本当、地獄。

ウイナ そうだよ。演劇は「不要不急だ」なんて、言われてたしね。「不要不急」じゃねつつんだよ。

なあ？

ぺしゅ。

（アスカに向かってしゃべる）

アスカ

そういうことを忘れずに生きていつてほしい。と言っています。

リオ

そうだよね。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」っていうけど、忘れちゃいけないんだよね。

コンノ

そう。今こうしている間にも、世界中では、当たり前前（あたりまえ）にできていない人たちが大勢いるんじゃないかな。そして、こういうことをまた次に伝えていくことも大切だ。

ミヅキ

そっか。こんな思いはもうしたくないし、あんまり言うことじゃないって思ってたけど言ってみた方がいいのかな？

ユナ

よく「風化」するっていうけど、風化させないためには、言うことも大事じゃない？

ウイナ

じゃあ今度の大会さ、福島のことをやらない？

ミヅキ

お、いいねえ。

リオ

私たちってさ、意外と福島のこと知らないよね。

リコ

うん。知らない。

ウイナ

いや、お前はもうちょっと知っとけて。

みんな

（笑う）

コンノ

よし、じゃあ、今日は基礎練が終わったら、図書館で調べ学習をしよう。テーマは「福島を知る」だ。その前にまずは発声だ。河原に行くぞ！（走り去る）

皆、「待ってくださいよー」などと言いながらコンノ先生を追いかけて去る。

「ぺしゅ。」とアスカが取り残される。アスカは客席に笑顔でお辞儀をする。

ぺしゅ。

（アスカに向かってしゃべる）

アスカ

では、みなさん、ごきげんよう。と言っています。

「ぺしゅ。」は客席に手を振る。

音楽「今日までそして明日から」（吉田拓郎）
照明変化。

写真のスライドが流れる。

ぺしゅ。とアスカが去る。

歌の終了と同時に暗転。緞帳が降りる。

おわり

